

「学童保育から見えてくる“生きる力”って、何？」

続 博治（つづき ひろはる）鹿児島県児童クラブ連絡協議会事務局長／宮内児童クラブ

学童保育（児童クラブ）は、1998年4月に法制化されて12年がたちました。

いま、地域において所得格差と貧困が広がるなかで、子育てに悩む親や待機児童も急増してきています。子どもの発達保障と保護者の就労保障としての学童保育のニーズは高まってきていますが、そこで過ごす子どもたちの育ちの場としての居場所は、生きる力をはぐくむところになっているのでしょうか？

学童保育は、親が働いているからその間預かる施設であり、指導員は働いている親に代わって子どもの基本的な生活習慣（しつけや宿題等）づくりをすることであります。

「優しい」という字は、「人偏」に「憂い」と書きますが、やさしさって憂いのある人に寄り添うことです。子どもの育ちにとっても、親が働いているから親に代わって預かるという視点ではなく、寄り添いかかわることの優しさが求められていると思います。

この夏、学童保育はこれまでになく60名を超える大所帯となりました。おまけに、熱中症対策で屋外での遊びがほとんどできないで、屋内遊びが中心でした。大声で話すことが多く、ストレスが溜まりイライラする子どもたち…言葉づかいが荒くなり言うことを聞かない日々が続きました。そんな中、中途入所の子が「学童がこわい」と、夏休み明けには「やめたい」と言ってきました。おとなしい子で、元気な子からちょっかいを出されるのがいやだったのです。学童で、自分の時間と居場所を求めていたのに、そのことを理解してあげる余裕がなく、元気な子どもが問題だと保護者に問題を投げかけることになりました。

「やめたい、学童がこわい」のはどうしてなのか、その子とゆっくり話す機会を持つ中で、家ではお風呂を沸かしたり働いている親の手伝いや妹の面倒をよく見ていると、自分の言葉でしっかりと語ってくれました。その子に限らず、学童の子どもは自宅では働いている親を思い、少なからず気を使っているのです。いい子であることによる抱え込んだストレスが、学童での言葉づかいや指導員の言うことを聞かない行動になってきているのです。

放課後、子ども同士の世界で、気を使わず言いたいことをいい、悪ふざけやケンカをする中で“生きる力”を育んできたわたしたちの世代と違って、今の子どもたちは塾と習い事、そして学童と分刻みで1日を過ごしてきています。抱え込んでいるストレスを発散する場が学童保育であり、そのことを受け止め寄り添うことによる「優しい」が学童保育の指導員の“しごと”だと思います。親代わりに預かり“しつけ”をすることではなく、子どものあるがままの姿を受け入れ、寄り添うことによってその子の「憂い」をしっかりと受け止めてあげることです。

【『かごしまの子ども』第28号特集「生きる力」問い直す／2011年7月10日発行 掲載】